

脳科学から迫る「心のありか」

シリーズ  キリスト教と科学



脳が私の すべてなのか？

シャロン・ディリックス 著 森島泰則 訳

人間とは何であるのか——科学の進歩により、人間を組織する器官の内部まで可視化された現代。神経系の中樞を司る脳の解明こそが、「人間とは何か」の問いに答えを出すことができるのか。人間の脳と心の関係に着目し、脳科学の見地から「人間」について考える。

「脳が私のすべてなのか」は、「人間とは何か」という哲学的な問いなのだ。神経科学だけではこの問いに答えを出すことはできない。神経科学は、脳の中で何が起きているのかを美しいまでの繊細さで描き出してくれるし、「脳とは何か」とか「脳はどのように機能するか」といった疑問に答えを出してくれることは確かだが、「人間とは何か」という問いは、はたらきや仕組みを問うのとはまったく違う。この問いは、科学的方法を超えて哲学、倫理学、そして多くの人々が主張するように神学にまで及ぶのだ。(本文より)

四六判 208頁 定価1,870円(本体1,700円+税)

ISBN978-4-264-04487-1 C0016

いのちのことば社 卸コード 11105

シャロン・ディリックス (Sharon Dirckx)

ケンブリッジ大学から脳機能イメージングで博士号取得。現在、オックスフォード・クリスチャン護教学センター (OCCA) 非常勤講師。英国および米国で機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) による研究に従事し、米国では麻薬中毒に関する研究を行った。英国、欧州、北米において、科学、神学、「心と魂」、悪の問題に関する講演や講義を行なっている。最近では、オックスフォード大学で開催されたヴェリタス・フォーラムで講演し、BBCのテレビやラジオ番組にも出演している。また、最初の著書「Why?: Looking at God, Evil and Personal Suffering」は最優秀図書賞を受賞している。夫コンラッドと二人の息子アビーとイーサンとともにオックスフォード在住。